

ビワ生育情報

第 5 報
千葉県農林水産部
令和 5 年 2 月号

本年の開花は、11月の平均気温が高かった影響から、3品種とも開花盛期、終期ともに平年より早くなりました。また、1月下旬の寒波により、長時間低温に遭遇したため、一部で寒害が発生しています。

花房及び樹の発育

ビワの開花期は表1に示した。暖地園芸研究所の開花始期は、「楠」が11月10日で、平年より2日、前年より8日遅かった。「大房」が11月22日で、平年より2日早く、前年と同日だった。「田中」が11月10日で、平年より2日早く、前年より5日遅かった。開花盛期は、「楠」が11月21日で、平年より5日早く、前年より1日遅かった。「大房」が12月2日で、平年より15日、前年より8日早かった。「田中」が11月22日で、平年より10日、前年より2日早かった。開花終期は、「楠」が12月5日で、平年より19日、前年より3日早かった。「大房」が12月23日で、平年より35日、前年より9日早かった。「田中」が12月10日で、平年より28日、前年より2日早かった。

花房の出蕾期は「楠」、「田中」は平年並み、「大房」はやや早く、10月の平均気温は平年よりやや低く推移したため、開花始期は平年並みだったが、11月の平均気温が平年より高く推移したため、開花盛期及び終期は平年より早かった。1月25～26日の寒波により、長時間低温に遭遇したため、一部で寒害が発生している。

表1 ビワの開花期(暖地園芸研究所)

品 種	開花始期 (月. 日)			開花盛期 (月. 日)			開花終期 (月. 日)		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
楠	11.10	11. 8	11. 2	11.21	11.26	11.20	12. 5	12.24	12. 8
大 房	11.22	11.24	11.22	12. 2	12.17	12.10	12.23	1.27	1. 1
田 中	11.10	11.12	11. 5	11.22	12. 2	11.24	12.10	1. 7	12.12

平年：1992年～2021年の30年間の平均

令和5年1月の気象

令和5年1月の半旬別の気象を表2に示した。平均気温は第2半旬は平年より高く、その他半旬は平年より低かった。月平均気温は5.2℃で、平年より0.9℃低く、前年より0.2℃低かった。

氷点下日数は11日で平年より多かった。最低極温は第1、第2、第4半旬は平年よりも高く、第3、第5、第6半旬は平年よりも低かった。月全体の最低極温は第6半旬のマイナス4.6℃であった。

降水量は第3半旬で平年より多く、その他半旬は平年より少なかった。月合計は47mmで平年の50%、前年の118%であった。

日照時間は第1～第4半旬は平年より多く、第6半旬は平年並み、第5半旬は平年より少なかった。月合計は196時間で平年の112%、前年の103%であった。

表2 令和5年1月の気象(暖地園芸研究所)

半旬	平均気温 (℃)			氷点下日数 (日)			最低極温 (℃)		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
1	5.5	6.8	5.2	0.0	1.2	2.0	0.0	-0.1	-3.3
2	6.8	6.4	5.8	0.0	1.6	1.0	0.0	-0.8	-1.1
3	5.4	5.8	5.4	3.0	1.4	3.0	-0.9	-0.7	-0.9
4	5.7	5.9	5.7	2.0	1.6	2.0	-0.7	-0.9	-0.7
5	4.3	5.7	4.5	3.0	1.7	4.0	-3.8	-1.5	-1.5
6	4.1	6.1	5.9	3.0	2.2	0.0	-4.6	-1.6	0.6
平均/計/最小値	5.2	6.1	5.4	11.0	9.7	12.0	-4.6	-2.8	-3.3

半旬	降水量 (mm)			日照時間 (hr)		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年
1	0	8	0	39	30	41
2	0	22	10	42	29	23
3	32	15	27	33	28	33
4	2	9	0	35	27	35
5	6	15	3	13	27	25
6	6.5	22	0	34	35	35
計	47	92	40	196	175	191

平年：1991～2020年の30年間の平均

最低極温：各半旬あるいは1月中に記録した最低気温

なお、表の数値は、表示単位未満を四捨五入したため、合計値と内訳の計が一致しない場合があります。

3月の作業

ビワは厳寒期を過ぎて春が近づくと、枝葉の伸長が始まり、果実の肥大が急速に進む。しかし、春先は夜間に冷え込むことがあるため、3月中旬頃までは寒害の発生が心配されるマイナス3℃以下の低温に注意する。また、育苗を行う場合、3月になると台木の芽が動き始めるので、接ぎ木は3月中に行う。摘果や袋かけは寒害発生の恐れがなくなった頃から始める。

摘果・袋かけ

摘果・袋かけの作業は、3月以降、寒害を受けにくい園から始める。寒害を被った果実は、種子が少なく、形がいびつとなり、成熟前に落果することが多い。袋かけ作業をした後に寒害を被るとその果実が無駄になってしまうので、作業開始が早くなりすぎないように注意が必要である。一方、4月下旬以降まで作業が遅れ、果実の肥大が進むと擦れ傷、虫害などを被りやすくなるので、適期を逃さない様に行う。

標準的な着果程度は1果当たり20枚の葉が必要である。摘房が十分でない樹は最終的な着花房率が60%になるように摘房する。着果房数が多い樹では1果房に1～2果残し、着果房数が少ない樹では収量を確保するために3果以上着生させる。3果以上着生させると、葉枚数が適正でも果実が小さくなることがあるので、着果房数が少ない場合や個数を重視するときのみ着生させるようにする。

接ぎ木

接ぎ木の適期は、台木の芽が動き始める2月下旬～3月中旬であり、天気の安定した時期を選んで行う。気温の低い日に作業すると、接ぎ木の活着率が低下する。4月に入ると切り口から樹液の溢出が多くなり、接ぎにくくなるので、3月中に終わらせる。台木は接木部の直径が1.5cm以上のものを用いる。太いものほど活着後の生育は良いが、あまり太いものは取り扱いに不便である。

【問合せ先：千葉県農林総合研究センター 暖地園芸研究所 特産果樹研究室
電話 0470-22-2961】

※果樹の生育情報は「ちばの農林水産業」の「生育情報」でも御覧いただけます。
<http://www.pref.chiba.lg.jp/seisan/seiiku/index.html>